

# ラジーシチェフの人間像

## ——ロシアにおける近代的社会批判の開始——

白 倉 克 文  
基礎教育課程

On Radishchev's Character  
—The Beginning of Modern Social Criticism in Russia—

SHIRAKURA Katsufumi

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 6, 2009 ; Accepted January 14, 2010)

### I はじめに

アレクサンドル・ニコラエヴィチ・ラジーシチェフ(1749–1802年)はロシア解放思想の父、あるいはロシア・インテリゲンツィアの創始者としてしばしば称されるが、その呼称の正当性は、『ロシア哲学史』の著者ゼンコフスキーの次の記述からも確認できる。「ラジーシチェフの名前は殉教者の栄光に包まれている。それだけでなく、ロシア・インテリゲンツィアのその後の諸世代にとってラジーシチェフは、眩いラジカルなヒューマニストとして、また社会的問題解決の熱烈な唱道者として、一種のシンボルとなった。」<sup>1)</sup> 一方文芸学者ロートマンは彼を「ロシア史上最も謎に包まれた人物」とし、真の意味での「百科全書家」と評している<sup>2)</sup>。事実ラジーシチェフは波乱万丈の人生を生き抜き、人間の三大心的要素である知情意の悉くを壮大なスケールで発現した稀有な人物であった。筆者は彼の後半期の著作と活動については数編の論考を発表したが<sup>3)</sup>、より重要な前半期の活動については未発表である。そこで今回は前期について、すなわち幼年期より『ペテルブルグからモスクワへの旅』の発刊による投獄と死刑判決、さらに減刑によるシベリア流刑に至った時期について考察してみたい。先ず略伝と著作のあらましを紹介し、次に主著『旅』を含む主要作品を検討し、最後に獄中の執筆活動について考察してみたい。

社会主義体制が崩壊して以降、ロシアではラジーシチェフに関する研究は比較的低調であったが、近年になってソヴェート時代とは異なる視点からの研究論文が刊行されている<sup>4)</sup>。日本でも既に半世紀以上前に『旅』が完訳されており<sup>5)</sup>、以降関連論文が少しずつ発表され、その数はかなりの数にのぼっている。最近は民俗学や比較思

想史など新しい観点からの取り組みが成果を挙げている<sup>6)</sup>。本稿では筆者の従前の研究成果を踏まえつつ、これまで未発表であった時期の著作活動を吟味することによって、彼がロシアにおける近代的な社会批判の最初の実践者—少なくともその一人—であったことを明らかにしたい。

### II 略伝、著作、及び時代背景

#### 1. 略 伝<sup>7)</sup>

アレクサンドル・ニコラエヴィチ・ラジーシチェフは父ニコライ、母フェクラの下に11人兄妹(7男4女)の長男として1749年に生まれた。父は教養の高い八等官の貴族で、三千人ほどの農奴を有し、サラトフ近郊のネムツォヴォやヴェルフニエ・アブリャゾヴォに領地を持っていた。ラジーシチェフは幼少の7年間をヴェルフニエ・アブリャゾヴォで過ごし、扶育係のマモンソフから読み書きを学び、乳母のクレメンチェヴナから民話や諺や歌を教わった。

母フェクラは名門貴族アルガマコフ家の出身であり、その縁でラジーシチェフは1757年から近親のミハイル・フョードロヴィチ・アルガマコフ家に居住し、モスクワでの生活を始めた。親戚筋のアレクセイ・ミハイロヴィチ・アルガマコフがモスクワ大学の初代学長であり、ラジーシチェフは親戚の子供たちと共に、大学や関連機関の教員たちから直接授業を受けることができた。自由思想の信奉者であるフランス人家庭教師からも教えを受けた。

エカチェリーナ二世との運命的な係わりはモスクワでのこの少年期から始まっている。彼女は1762年9月にモスクワに入り、クレムリンで戴冠式を挙行了。当時アルガマコフ家の一員が宮廷の小姓を勤めていたが、転職

となり、小姓に欠員が生じた。アルガマコフ家はその後任としてラジーシチェフを推挙した。こうして彼の宮廷勤務が始まった。1763年6月に女帝はモスクワからペテルブルグに戻り、ラジーシチェフも同行したが、これがおそらく彼にとって最初の両首都間の旅であった。身分は小姓で、宮廷での接待や給仕を主な仕事とし、宮廷のすべてを観察できる立場であった。自由時間に恵まれ、音楽会や演劇を楽しみ、女帝に随行して首都内外の名所を訪れることも多かった。小姓は中央陸軍幼年学校の生徒を兼ね、フランス語、ドイツ語、ラテン語、数学、舞踏、絵画、音楽等々、多種多様な教養の会得が可能であった。こうした生活が1766年まで3年間ほど続いた。

即位後ロシアにおける法の不備を痛感してきたエカチェリーナ女帝は、改善の一方策として、法学を学ぶ留学生をヨーロッパに派遣することとした。12人のメンバーの中6人が小姓から選ばれ、ラジーシチェフもその一員となった。監督官ボクーム夫妻、聴聞司祭パーヴェル、二名の召使と共に、一行は1766年9月にペテルブルグを立ち、翌年2月にライプツヒヒに到着した。大学では法学（自然法、国際法、ローマ法）、道徳哲学、歴史学、ドイツ語、フランス語、ラテン語他を学んだ。当時の有名な教授としては、詩人のゲレルトや哲学者プラトネルなどがいた。留学は1771年10月まで4年余り続いた。

これまでの記述からラジーシチェフの成長過程の特徴が明らかになった。彼は最初の8年間を農村で過ごし、次のほぼ10年間をロシアの両首都で生活し、さらに数年のヨーロッパ留学を体験した。ロシアの農村文化と宮廷文化を体験し、しかもヨーロッパの先進文化を体感したわけである。

帰国したラジーシチェフは早速官吏としての道を歩み始め、1771年12月に元老院第一部に調書作成官の職務を得た。職位は9等文官であった。この部署は内政、外政、通商、農政、税務等々を統轄し、調書作成官の業務には事件調査、調書作成、判決文の準備作業などが含まれていた。これらの仕事を通じて彼はロシア社会の実情を詳細に把握できたはずである。しかし1773年に親友クトゥーゾフが辞職すると、彼もそれに続いて職を辞し、1年半余りの元老院勤務は終了した。同年5月に彼は武官に転じ、法務官としてフィンランド師団に所属した。軍における裁判の進行役、新兵派遣業務、会計等々が仕事の内容であった。上官のブリュス伯爵の家は中心部である宮廷広場の一角にあって、上流貴族の集いの場となっていた。ラジーシチェフは社交を楽しみ、外国の劇団が催す演劇やオペラなどを観賞した。イギリスクラブにも入会していたし、フリーメーソンの支部を訪問することもあった。しかしこうした生活も長くは続かなかった。内憂外

患の状況にあったロシアは、1774年7月にトルコとの間に講和条約を結び、翌年1月にプガチョフの乱を鎮圧した。女帝はモスクワへ出向いて祝賀行事を開いたが、その時ラジーシチェフもブリュス伯爵と共にモスクワ入りし、「家庭の事情」を理由に辞職を願い出た。それは3月31日に国家軍事協議会によって受理された。退職時の位は2等少佐であった。同年に彼は友人ルバノフスキーの姪アンナ・ワシーリエヴナ・ルバノフスカヤと結婚している。

1776年9月にラジーシチェフは女帝に仕官依頼状を提出した。翌年12月に彼は元老院から指令を受け、商務省で陪審判事として1778年1月より勤務を開始した。仕事は通商全般にわたっており、内外の通商問題の解決、産業開発、外人との折衝、海外駐在ロシア人との連絡、及び商人からの請願受理などであった。当時の商務省の長官はアレクサンドル・ロマノヴィチ・ヴォロンツォーフ伯爵であり、彼はヨーロッパ各地で外交官として活躍した進歩的な教養人であった。以降ラジーシチェフは生涯に亘ってこの人物から庇護を受けることになる。商務省での勤務は順調であり、彼は1779年に8等文官に、1780年には7等文官に昇進した。特に、サンクトペテルブルグ県で行政機構が改変され、税務監督局参事官に着任してからの活躍は目覚しかった。長官ゲルマン・ユリエヴィチ・ダーリの下に新しい税関の創設に尽力した結果、彼は税関次長に選ばれ、精励ぶりに対して1000ルーブルが付与された。1783年には6等文官に昇進し、さらに聖ヴラジーミル4等勲章を授与された。年給も450ルーブルから750ルーブルに引き上げられた。税関次長の仕事としては各国領事館への訪問、商人と検査官とのトラブルの調停、外国船の調査、マーケットの立ち入り検査などがあったが、官吏としての卓越した能力は、当時の多くの報告書や手紙に示されている。

ラジーシチェフはエカチェリーナ女帝から厚い信頼を得ていたようである。長男ニコライは父と女帝との関係を、父の伝記の中で次のように記している。「女帝はアレクサンドル・ニコラエヴィチの揺ぎ無い公正と清廉潔白に信頼を寄せた。彼女の命令により、細心の配慮を要する任務が彼に委ねられた。例えば対スウェーデン戦開始時におけるスウェーデン商船の捕縛と差押え、サンクトペテルブルグの全店舗における発禁商品の搜索などである。」<sup>8)</sup> これらの任務の遂行状況はラジーシチェフ自身によって書き残されている。彼は1790年4月30日にスウェーデン船舶監視の指示を部下に与えているし、6月2日には税関の景況と戦争の推移について、ヴォロンツォーフ伯爵に報告している。模範的な官吏としての活動は、まさに『旅』の発刊直前まで続けられていた。

## 2. 著 作

流刑以前の著述の概況を紹介するために、ロシア語版全集<sup>9)</sup>に収録された作品名とその執筆時期を記してみよう。それらは翻訳、仕事関連の著作、文学作品に大別できる。

翻訳作品としては、アルバニア貴族アントン・ギガ原作の「キリスト教ヨーロッパへのギリシャ人の願い」が1771年ごろに執筆された。それは帰国後最初期の作品と見なされる。次にフランスの哲学者ガブリエル・マブリの原作になる「ギリシャ史もしくはギリシャ人の幸と不幸の原因に関する考察」がある。この翻訳はエカチェリーナ女帝の命令で1768年に設立された組織「外国書籍翻訳促進協会」の下で行われ、1773年に刊行された。この翻訳には君主制を否定的に捉えるラジーシチェフ自身の見解が註釈に添えられており<sup>10)</sup>、当時の彼の関心が政体の在り方に向けられていたことが推測される。もう一つの翻訳は1773年から翌年にかけての、すなわち武官時代の作と考えられる、ドイツ語からの翻訳「仕官訓練」である。

次に仕事関連の自著書に移ろう。まず立法に関するものとして「立法試案」(1782-89年)、「善行と刑罰について」、及び「断章」(80年代)がある。数が多いのは関税に関する著作である。まず「新基本関税率案」(1781-82年)と「通関手続きについて」がある。後者は次の二点からなる。①「ベラルーシ総督パセク氏の報告に関する批評」(1783年)、②「ペテルブルグ税関長ゲー・ユー・ダーリ氏の報告に関する覚書」(1789年以降?)。また次のような報告書類がある。「ポーロツク県の税関員によって差し押さえられたフランスのウオッカについて」(1785年)、「マーケットに関するメモ」(1788-89年)、「ポーランド国境税関における外国商品輸送の禁止に関する報告案」(1789年)、「密輸品検査廃止に関する商人の請願に対する覚書」(1789年)、「リガ貿易に関するリフランディア総督ブラウン氏の報告に対する覚書」(1789年)。立法と関税関連以外の著作として「ペテルブルグ県の税金についての記録」(1786-89年)と「ペテルブルグ県に関する記録」(1789年以降?)がある。特定の地区に関する同様の著作は流刑後にも書かれており、「トボリスク総督区の記録」(1790-91年)がそれである。

文学関連の著作は韻文と散文とに分類される。前者としては頌詩「自由」と長詩「世界創造」がある。散文としては次のものが挙げられる。「一週間の日記」、「職務でトボリスクに住む友人への手紙」、「ウシャコフの生涯」、そして最後が『ペテルブルグからモスクワへの旅』である。この他の全集収録作品として、1789年に雑誌『論争する市民』に匿名で掲載された論文「祖国の息

子とは何かについての対話」があるが、この作は真筆が確定されていない。最後に獄中で書かれた著作として、子供たちへの遺書2通、シェシコフスキーへの手紙3通、及び聖者伝の翻案「フィラレート伝」がある。本稿ではこれらの中から「自由」、「友人への手紙」、「ウシャコフの生涯」、「旅」、及び獄中での著作を選んで検討してみたい。

ラジーシチェフの前半生の著作は仕事関連のものと文学作品とに明確に区分される。この特色は逮捕される直前に最も際立って発揮された。両者の内容が対立するものなのか並存するものなのかについての考察が必要であるが、判断材料の一つは、彼が流刑後の後半生においてもまた、同じようなスタイルで著述を続けたことである。生涯にわたって仕事と文学の両面的著述を継続したことは、彼において両者が対立・矛盾していたのではなく、並存していた可能性を示唆している。両者は異なる分野での創作活動であり、対立よりもむしろ補完の関係にあったのかもしれない。

## 3. 時代背景—エカチェリーナ二世の統治<sup>11)</sup>

1729年生まれのエカチェリーナ二世はラジーシチェフより20歳年上である。彼女の治世は1762年から1796年までの長期に亘り、それは本稿の対象期間と完全に重なっている。彼女の治世の概要を把握し、その明と暗、光と闇を照射してみよう。

先ず光に包まれた啓蒙君主としての側面を眺めてみよう。ピョートル大帝の意思を継いで、彼女はロシアの近代化のために様々な施策を試みた。啓蒙思想に通じていた彼女は、ヴォルテールやディドロなど多くの著名な知識人との交友で名を馳せていた。国民各層から成る法典編纂委員会を招集し、「訓令」を發布するなどして、法治国家の原則を説いた。地方行政や司法制度を改革し、病院や孤児院などの公共施設を建設し、中央の行政府の合理化を推進したりもした。さらに医学参事会を創設し、「ロシア言語アカデミー」を設けて、最初のロシア語辞典の発刊を指導した。帝室劇場の建設にも尽力し、エルミタージュ美術館の収蔵品を飛躍的に充実させもした。教育行政にも深く関与し、「国民教育委員会」を設置したり、「国民学校に関する法令」を發布して一般教育の充実を図り、さらにスモリーヌィ女学院を創設して女子教育の基礎を築いた。これらの諸事例は啓蒙君主としての彼女を特徴付ける光の側面を示している。

しかし逆の、国民を苦しめるに至った政策も、少なからず実施された。1785年に公布された「都市に対する恵与状」と「貴族に対する恵与状」は、貴族による領地と農奴の所有化を推し進め、結果として農奴制の強化を招いた。関税の免除で貿易額は増大したが、インフレ対



策が奏功せず、増税が実施された。一方対外政策について見れば、諸戦の勝利は領土の拡大をもたらしたが、打ち続く戦争は国民に極度の窮乏を強いた。1768年から1770年にかけての対トルコ戦争、1772年に始まるポーランド分割、1787年夏から1791年までの第2次トルコ戦争、さらに1788年から1790年8月までの対スウェーデン戦争と、彼女の治世は戦争の連続であった。戦争は増税とインフレを生じせしめたし、徴兵の実施は国民に極度の負担を強いた。女帝はロシアの農業の改善にも関心を持ち、農民の未来像に関する懸賞論文を募集するなどして、改善への心意気を示しはした。しかし実効は無く、農民の窮乏化は益々進展した。1773年にはブガチョフの乱が勃発して数年続いた。彼女は早くから治安の維持に意を注ぎ、即位後まもなく秘密調査局を設置して、ステパン・イヴァノヴィチ・シェシコフスキーに統率させた。フランス革命後には特に反動政策を露にし、ヴォルテールの著作も禁止するなどして、外国の書物や雑誌への検閲を強化した。

女帝はヨーロッパを驚嘆させるほどの規模で絵画、彫刻、装飾工芸などの高級品を買い集め、ヨーロッパ市場最大の買い手にまで成長していた<sup>12)</sup>。彼女が築き上げた宮廷文化は史上稀に見る豪華絢爛の域に達していた。このことは後進国ロシアで富の集積が極度に進行したことを示しており、もちろんその背後には極端な貧困が隠されていた。ラジーシチェフの著作活動はこのような時代状況の中で進められた。

## II 初期作品

### 1. 頌詩「自由」

54連からなるこの長詩は「自由」に捧げた頌詩であり、1781年から83年にかけて作詩された。約三分の一が『旅』に転載されたが、全文の刊行は1905年の革命の後であった。この詩には人間が本来生きるべき姿が提示され、ラジーシチェフのユートピア像が示されている。それは天からの授かり物である「自由」が実感される生き方である。第二連で彼は次のように「自由」に向かって呼びかける。「私が生まれた時、汝は共にあった。……私は思うことを発言する。愛し愛されることができる。善を成して尊敬される。私の法は私の意志である。」(1)<sup>13)</sup>自由が保障された所でこそ人間は幸せを享受できるし、生産性を富ますこともできる。「彼は愛し、彼女に愛されている。労働は喜びであり、汗は露である。」(10)自由はまた人間の活動を鼓舞する作動因としての役割を果たしている。それは人間の創造性を刺激する力を有し、偉大な探検家や科学者はその享受者としてこの世に出現する。コロンブスとガリレイがその例である。「コロン

ブスは未知の国々へ海原を果敢に疾駆する。しかしガリレイも奇蹟を成し、空間を通過し、創造性に富む己の手によって、天体を明白に証明した。」(9)

自由の概念を基軸にしつつ、ラジーシチェフはこの詩の中で独自の歴史観を展開する<sup>14)</sup>。彼は世界史を自由社会と奴隷制が交互に循環するものとして捉える。原初の状態を脱した人間はまず理想社会を成立させた。そこでは法律の下に真理が尊ばれ、裁判の公正と秩序が維持されていた。しかしやがて政治権力が宗教と結託して、人間能力を劣化させ、奴隷制を生じせしめた。そこでは人間の知性は生かされず、産業は停滞し、ツァーリが国民の生死を握り、暴虐を恣にした。だが自由を予言する復讐者の登場と共に、国民が武器を手を決起し、ツァーリを処刑して自由を回復した。この歴史観は『旅』の次の表現で総括される。「迫害から自由が生まれ、自由から奴隷制が生まれるのが、自然の掟である。」(361)このような歴史観を懐きつつ、ラジーシチェフは現実の世界を「奴隷制の闇」の中にあるとみなし、ロシアそのものもそこに含めた。

循環的な歴史観を例証するものとして、史実が挙げられている。理想社会から奴隷制へ舵取りをした人物として、古代ローマの三人の政治家が引証される。マリウス、スラー、及びアウグストゥスであり、彼らは共和制から君主制への移行を促した悪しき統治者である。「マリウスと同様にスラーも、揺れるローマ人の心を乱し、心に悪徳を蘇らせ、市民を傭兵部隊に編入させた。」(12-13)最後にアウグストゥスが巧妙な手段で自由を葬り去った。「不安定な自由を麻痺させ、鉄の王笏に花を巻きつけた。国民は自治だと思っていたが、アウグストゥスは彼らの首を絞めていた。」(13)逆に奴隷制から自由社会を生み出した先導者としてクロムウェルとルターが挙げられる。クロムウェルはチャールズを処刑した極悪人であるが、自由をツァーリから国民に奪取したが故に賞賛に値する。「けれどもお前は子々孫々に、いかにして諸国民が復讐を遂げうるかを教えた。お前はチャールズを裁いて処刑した。」(8)宗教改革者ルターも同様に解放者として称えられる。「偽りの贖罪を嘲笑し、啓蒙の光を掲げて、ルターは天と地とを和解させた。」(8)ラジーシチェフのほぼ同時代人であるワシントンも、自由の体现者として登場する。アメリカは獣の行為がはびこる地であるが、ワシントンはそこに生まれた稀有な指導者である。「おお揺るぎ無き勇士よ、汝は過去も今も無敵である。ワシントンよ、汝の指導者は自由なり。」(11)

自由の概念と循環的歴史観とに導かれて、ラジーシチェフは抵抗権と反乱権を人間の本来的権利として主張する。反乱を象徴する史的人物や架空の人物に呼びかけ、彼ら

の再来を祈願する。早くも第一連で、ブルータスとウィリアム・テルが反乱の象徴者として呼び出される。「ブルータスもテルも今一度目覚めよ、玉座に着け、御身の声もて、ツァーリどもを怖れさせよ。」(1) 現実世界は「奴隷制の闇」の中にあると規定され、その根源を成す存在としてツァーリが断罪される。エカチェリーナ女帝は『旅』に転載されたこの詩を読んで、怒りを募らせ、次のような感想を残している。「反逆性が明々白々な頌詩を含んでおり、そこでは断頭台に架けるといってツァーリが脅されている。クロムウェルの例が称賛されている。これらの頁は犯罪的であり、完全に反逆的である。」<sup>15)</sup>

頌詩「自由」のタイトルは *вольность* であるが、自由を意味する別の二つの単語が使用されていることにも注目しなければならない。一つは *свобода* という語であり、第34連でワシントンに向かって呼びかけた、上述の叫び「汝の指導者は自由なり」で使われている。もう一つは第二連で使われた *воля* である。「私の法は私の意志である」と訳して先に紹介した箇所であり、原文は“Закон мой—воля есть моя”である。*воля* には「自由」と同時に「意思」の意味が含まれ、さらに「随意」や「自発性」も含意されている。この頌詩には人間に対するラジーシチェフの根源的な理解が示されており、人間は本来は幸福に生きるべき能力と権利が与えられている、との認識が示されている。

## 2. 「職務でトボリスクに住む友人への手紙」

書簡体で書かれたこの小品の冒頭には、「1782年8月8日サンクトペテルブルグ」と記されている。その前日はフランス人彫刻家ファルコネの制作になるピョートル大帝の騎馬像の除幕式が挙行された日である。ここでラジーシチェフは式典の状況を活写し、彫像に芸術的な評価を与え、それと同時に、ピョートル大帝とエカチェリーナ二世に対する自分自身の評価を開陳している。執筆の時期は頌詩「自由」と重なるが、刊行は8年ほど後の1790年初頭である。自宅に設置した印刷機で印刷し、『旅』に先立って、匿名で刊行した。執筆と刊行の時期の遠い隔たりは、青春期から壮年期にかけての彼の思想の継続性を証明している。

ピョートル大帝に対しては肯定と否定の相反する評価を下している。肯定的な評価は次のように下される。偉大な支配者とはアレクサンダー大王、コンスタンティヌス帝、フリードリッヒ二世などのように、「大きな欠点を持っていても、祖国への奉仕によって通常人から抜きん出た人物」(150) のことである。しかるにピョートル大帝は、「これまで無活動の状態にあったかくも巨大な国家に、初めて志向性を与えた」(150) 偉大な君主である。それゆえロシア史に対する大帝の功績は顕著で

ある。ピョートル大帝に対するルソーの否定的評価を意識しつつ、ラジーシチェフは次のように結論する。「ジュネーブの市民に反して、我々はピョートルを稀有な国土、偉大という名称が正当に値する国土と見なそう。」(150) しかし肯定的な評価と並行して否定的な側面が強調される。ピョートル大帝を「軍の秩序への盲従の手本を最初に与えた人」(149) と表現し、さらに強制や強圧によって自由を抹殺した君主として、次のように記す。「愛する友よ、自分の祖国の自然のままの自由の最後の印までも根絶させてしまった、かくも権力欲に燃えた専制君主を称賛することによって、君に心の中で軽蔑される者にはなるまい。彼は死者だ。死者にへつらう事はできる道理がない！正に私が言いたいのは、ピョートルは私的自由を確立して、自らも高まり自らの祖国も高めたならば、名声をより高めることができたであろう、ということだ。」(150-151) 専制君主としてのピョートル大帝に対する否定的な評価は次のようにも表現されている。「おおピョートルよ、汝の偉業が汝に対する驚嘆と尊敬の声を呼び起こした時に、汝の気宇と才知の大きさを誉めそやしていた何千もの人々のうちに、ただ一人でも心の底から汝を称揚していた者があったろうか。半ばの者はご機嫌取りだったのだ。彼らは胸の中では汝を憎み、汝の諸事業を非難していた。あとの半数は、際限のない専制権力に対する恐怖の念にとらわれ、汝の栄光の輝きの前に卑屈にその瞳を伏せていたのだ。」(148) ここでラジーシチェフは人間の内発性に関する問題を提起し、強権によって人間の自由意志が圧殺されている状況を憂えている。

エカチェリーナ二世に対しては直接的な批判こそ示されていないが、彼女の先導で式典が行われたことに対して、次のような批判が与えられている。「我々の顕彰が汝の継承者の範に従ったものでなかったとしたら、それはいっそう活気に充ちたものとなり、汝に相応しいものであったろう。それは相応しい範ではあっても、自らと等しい人間何百万人もの生と死とを自己の手中に握っている人の範なのだ。我々の顕彰はもっと自由であったろう。汝の彫像の除幕式は、民衆が自分の喜びのうちに永遠なる父に贈る感謝の祈禱式になっていただろう。」(148) 死後60年を経て客観的評価が可能な時代になって、ピョートル大帝の偉業は大多数にとって得心のいくものである。だとしたならば、除幕式が権力者であるエカチェリーナ二世の先導で行われなかったら、もっと活気に満ちていただろう、との感慨は、人間の心の自発性を最重視するラジーシチェフの心性を見事に表しており、頌詩「自由」の主張と合致している。

エカチェリーナ女帝は後にこの著作を読んで怒りを募らせ、次のように記した。「この著作もラジーシチェフ

氏のものであり、印をした箇所から明らかなように、彼の思念は早くから既定の方向へと準備されており、フランス革命がロシアで最初の活動分子になることを彼に決意させたのだ。」<sup>16)</sup>

### 3. 「フォードル・ヴァシリエヴィチ・ウシャコフの生涯」

1788年に執筆され、翌1789年に科学アカデミー印刷所で印刷され、匿名で刊行された。「第一部ウシャコフの生涯」と「第二部考察」とからなり、前者は友人ウシャコフの人生を回顧しつつ、ラジーシチェフ自身の当時の心境を吐露したものであるが、後者は外国語で書かれたウシャコフの著作の翻訳である。本稿では前者のみを検討する。

エカチェリーナ二世が派遣した留学生の一員として、ラジーシチェフは1767年から1771年までドイツのライプチヒ大学に留学した。この作品は留学時代の回想録であると同時に、自身の最新の思念の告白録でもある。「友人への手紙」と同じく書簡形式で書かれており、宛名人は留学を共にした友人クトゥーゾフである。留学時代の友情を感動的に回想し、それが今も自分の心中で重要な部分を占めていることを強調した後に、次のように執筆意図を明らかにしている。「そのように考えめぐらすことによって、私は我々の仲間フォードル・ヴァシリエヴィチ・ウシャコフの生涯を叙述する気持ちになったのです。私はそこに私自身の満足を見出します。また、最愛の友である君に、最近の私の心の起伏を開いて見せたいのです。というのは、故人の描写の中に、まだ生存している者の特徴を、君はしばしば発見するだろうから。」(156) この作の執筆は帰国後17年ほどが経過しており、頌詩「自由」と「友人への手紙」の執筆からも6年ほどが経過している。このことは、著者が学生時代の体験をその後の官吏時代にも大切に保持し続けたことを証している。「最近の私の心の起伏」という表現にはどのような内容が込められているのだろうか。この点に留意しつつ、考察を進めてみたい。

作品で最も熱を込めて語られるのは、監督官ボクームに対する留学生の反乱についてである。両者の抗争は大学理事会で審理され、ロシア公使の仲介を経て決着するほどの由々しいものであった。ラジーシチェフは抗争の結末を次のように記している。「半ば滑稽で半ば悲惨なこの事件は、公使がライプチヒに到着して、我々とボクームを仲直りさせたことをもって終結した。」(175) 反乱の経過を辿りつつ、反乱の正当性を裏付ける思想を示すことがこの作品の最も重要な意図である。すなわち、反乱肯定の思想が現実の体験を通して構築されてゆく過程が、入念に描写されているのである。結論としてこの

体験は次のように総括されている。「我々すべてにとって多くの点で実践的な道徳的教訓であり、」(166)「その時は我々にとって不快な出来事であったが、実は多くの教訓を生き生きと我々に与えてくれた。」(173) 反抗の理論的根拠を、学生たちは主として自然法理論に求めた。仲間の一人エヌがボクームから不当な殴打を受けたが、その際の学生たちの心境が、次のように描かれている。「我々は当時自然法の講義を聞き始めたばかりであった。自然法全体の関連をまだ捉えてはおらず、侵害によって人間の心の中に引き起こされる最初の動きの箇所に留まっていた。自分が行動する際に、自然の状態における人間は侵害が行われる場合には、最小の障害も覚えずに、自己保存の感情に引きずられて、侵害を防ごうという気持ちが沸き起こる。ここから報復、言い換えれば、目には目を、の古来の法が生まれる。それは人間がいつも感じているが、しかし市民法によって遮られ、制限されている法である。未熟な考え方であったが、それは我々の理性に、我々が我々の監督者との関係において自然の状態にあることを示した。そして我々は、エヌはボクームから受けた頬打を彼に返すべきである、という結論に達した。」(170)

頌詩「自由」においても、横暴な専制君主に対する国民の権利として反抗権が主張されており、その意味ではこの作品も同一テーマを扱っている。しかしここでは反抗権の適用範囲が拡大されている。監督官ボクームによる学生たちへの横暴は例外的な事例ではなく、社会に蔓延するものであること、さらに反乱権は社会一般に適用されるべきであること、が学生反乱の経過を物語ることによって、明示されているのである。「服従者における反抗が、たとえそれが正当な反抗であろうとも、より適切に言うなら、正義を想起させる唯一の方法であろうとも、ここで強者の側から憤怒と威嚇を招いたことに、驚いてはならない。これは専制政治においてはほとんど遍く生ずることだ。従がうべき法律を持たず、自分の意思や気まぐれ以外のいかなる規律にも束縛されない君主の専制の例に導かれて、すべての長官は無限の権力の一部を行使することによって、自分が全体の君主と同様な、一部分の君主であると考えに至る。こう述べることは実に尤もであり、長官の権力への犯行は最高権力に対する侮辱であると、規則によって是認されていることが稀ではない。祖国を愛する何千もの市民を牢獄に押し入れ、彼らに死をもたらす災いなる思想。精神と理性とを締め付け、秩序と平安の名の下に、尊厳なる心の場所に小心、盲従、困惑を据え付ける、災いなる思想よ。」(161)

ロシアは君主を頂点とし、大小無数の「長官」が不当な権力を縦にする、支配と被支配の関係が貫徹している



国家であり、このような不幸な現実には是正されなければならない。ラジーシチェフが言う「最近の私の心の起伏」にはおそらくこのような義憤の念が含まれていた。支配・被支配に関するラジーシチェフの心境を窺わせるものとしては、「市民」と「大臣」を対置させた、註釈に記された次の文章が挙げられる。「大臣の職務にあって称賛を受けるためには知力が必要であり、誠実はさして必要ではない。奸智、狡猾、そして状況に応じて威張ったり卑屈になったりする技巧は優れた大臣を作ることができるが、良き市民を作るとは決してできない。」(169) これは官位を捨てて留学の道を歩み始めたウシャコフの心境にも通じるものである。ラジーシチェフは学生反乱のエピソードを詳述することによって、支配者に対する被支配者の反抗の権利を体験的かつ理論的に立証しようと試みたわけである。そしてロシア社会に蔓延する不正を具体的に摘発することが、次の著書『旅』の課題であった。

父の伝記を残した三男パーヴェルは、「ウシャコフの生涯」を読んだダシコワ公爵夫人の反応を伝えている。彼女はヴォロンツォーフ伯爵の妹で、ロシア科学アカデミーの院長の要職にあった女性である。彼女は兄に次のように語った。「この書物は作家熱に浮かされて書かれており、文体も思想も未熟であって、この時代にとって危険な理念を含んでいる。譴責処分に値する著作を将来著すことになるかもしれない。」<sup>17)</sup> ダシコワ夫人は時代に対する激しく真摯な批判精神を、この作品から直観的に感じ取っていたものと思われる。ラジーシチェフは官吏としての仕事を続けなければならないほど、ロシアにおける官僚制度の腐敗と農奴制社会の悲惨を痛感せざるを得なかった。それを摘発することは危険を伴うものであるかもしれないが、たとえそうであってもそれを実施せざるを得ない、切羽詰った心境に迫りやられていた。「ウシャコフの生涯」にはそのような心境が反映されている。

### III 『ペテルブルグからモスクワへの旅』

#### 1. 刊行経緯、形式的特徴、執筆意図<sup>18)</sup>

原稿は1788年末に完成し、翌1789年の春にペテルブルグ風紀粛清局に提出され、7月22日付けで印刷許可を得た。印刷は自宅に購入した印刷機によって、12月末から半年ほど秘密裡に続けられた。印刷の過程で検閲原稿に訂正と加筆がなされた。約650部が1790年の春に著者名を秘して刊行された。発売されると回し読みや筆写もされて、短期間で反響を呼んだ。程なく官憲による捜査が始まり、6月末にラジーシチェフが著者として逮捕された。

この著作にはローレンス・スターン作『センチメンタ

ル・ジャーニー』が影響を与えているが、それは特に形式において著しい。逮捕後の供述でラジーシチェフは次のように述べている。「このような形式の書物を執筆しようと最初に思い立ったのは、ヨリックの旅行記を読んだ時でした。……書き続けながら、私の脳裏には私が聞き知った様々な出来事が去来しました。あまり詮索しないですむように、私はそれらをすべてこの書物に掲載しようと欲しました。」<sup>19)</sup> 1768年にロンドンで出版された『センチメンタル・ジャーニー』はドイツ語に訳されており、ラジーシチェフにはそれを読む機会が当然あった。両旅行記は構成が類似している。どちらにおいても各章が地名をタイトルに用いて、ほぼ独立した内容を保っており、全体としての有機的な関連性を欠いている。旅をする主人公の体験が主観を混ぜて述べられており、それと同時に、その他の登場人物による雑多な体験が会話、手紙、伝聞等々の形式で描かれている。『旅』の各章は一時に書かれたものではなく、10年ほどの長期に亘って書き溜められてきた。たとえば終章「ロモノーソフによせて」は1780年ごろに書かれたし、「トヴェーリ」の章に一部が挿入された頌詩「自由」は、既述のように、1781年から1783年にかけて執筆された。検閲について論じた「トルジョーク」の章は1789年から1790年にかけて執筆された。また「献辞」は全篇の完了後に加えられた。

『旅』は書簡形式を採っている。宛名 A.M.K. は前作「ウシャコフの生涯」の宛名であるアレクセイ・ミハイロヴィッチ・クトゥーゾフと一致する。このことは両作品が著者の心中で一続きの流れとして書かれたことを示している。「ウシャコフの生涯」のテーマが『旅』に継承されていることは、「献辞」に示された次の執筆意図から汲み取ることができる。「私は周囲を見回した。私の心は人類の苦悩に傷ついた。視線を自分の内面に向けてみた。人間の不幸は人間から生じることを、そして多くの場合自分の周囲の事象を正しく眺めないばかりに生じることを、理解した。」(227、3)<sup>20)</sup> 周囲に苦しむ人々が存在すること、そのような人々の苦悩の実情を把握し、共通の認識とすること。これが重要だが、しかし人間は共感し協力する能力を持つのだろうか。苦悶の末に著者は次の結論に達する。「私は人間の慰めを人間自身の中に見出した。……私は感じたのだ、同じ人間の善行において、いかなる者も協力者になりえることを。これこそが私をして以下のことを書かした思いなのだ。」(227、3-4) 刊行直前に追加された「献辞」には、危険を伴うであろう刊行を実施するに至る著者の逡巡と覚悟が反映されている。

このように考えると、『旅』の執筆と発刊は、貴族に対する啓発的な意図に支えられていたものと、理解でき

よう。このことは父の思い出を語った三男パーヴェルの記述からも首肯される。父は息子に次のように語っている。「もし自分の『旅』をフランス革命より10年か15年前に出版したならば、流刑どころか、むしろ褒章を受けていただろう。その根拠は、この本には政府が知らぬ多くの不正行為に関する非常に有益な指摘が含まれているからである。」<sup>21)</sup> 主人公である旅人は多くの場合悩める人物として登場し、時には自殺への誘惑に駆られさえする。彼は感受性豊かな貴族であり、貴族である自己の立場に安住できず、苦悶する。このような貴族像にこそラジーシチェフは期待を託していたのかもしれない。

## 2. 農民の悲惨と地主貴族の加害性

『旅』におけるラジーシチェフの社会批判はロシアだけではなく、世界全体に向けられている。頌詩「自由」の冒頭で「奴隷制の闇を光にせしめよ」と呼びかけたように、ラジーシチェフは現実の世界を奴隷制が支配する世界であると認識していた。この認識が突飛なものではなかったことは、世界史を振り返れば明らかである。英国が奴隷貿易を禁止したのは1807年、フランスでの禁止は1814年であり、アメリカの奴隷解放宣言ははるかに遅れて1863年であった。『旅』ではアメリカにおける奴隷制度の事例がしばしば挙げられている。「ホチーロフ」の章では旅人が次のような感慨を漏らす。「ヨーロッパ人はアメリカを荒廃させて、その畠を原住民の血でもって肥沃にした。」「ニジェルとセネガルの炎熱の河岸から来たこれら不幸な犠牲者たちは、自分の家や家族からもぎ取られ、未知の国へ移されて、良俗という重き権標の下に、彼らの労苦を蔑んでいるアメリカの、多産な畠を耕作している。」(316-317、169-170)「ヴィシニー・ヴォロチョーク」の章でも同じような感想が述べられる。アメリカで生産される砂糖やコーヒーを眺めつつ、旅人はかつての友人の言葉を思い出す。「君のカップに注がれたコーヒーと、その中に入れられた砂糖は、君と同じ人間の平安を奪った。それらは彼の力に余る労働の原因であり、彼の涙、呻き、苦しみ、恥辱の原因だった。」(324、184) 同じ思いは「ペシキ」の章でも語られている。

このようにラジーシチェフの批判は広く世界を視野に収めているが、彼にとって何よりも重要なのはロシアの現状であった。ロシアも例外ではない、いやむしろロシアこそが奴隷制の闇に沈んでいる、との思いが深かったのである。啓蒙を旗印としたエカチェリーナ二世の時代は農奴制強化の時代でもあった。農民の過半数は「農奴」と称される私領主の農民であり、過酷な労働を強いられていた。農民の無権利状態、そして貴族＝地主の全権という図式が完璧に成立していたのである。農民の抗議行

動や蜂起が多発し、農民による領主殺害事件も稀でなかった。ラジーシチェフにとっては自国の農民の悲惨を紹介することが焦眉の課題であった。

農民の悲惨な状況は多くの章で提示されているが、それは一つには地主の人格に起因するものとして示される。悪徳地主の典型が「ザイツォヴォ」の章に描かれている。低い身分の出身ながら宮廷仕えによって身を起し、八等官の地位と富を獲得し、郷里で土地を購入して地主に成り上がった男がいた。彼は農民をあらゆる方法で搾取し、虐待した。ある事件をきっかけに、農民はこの地主と家族を殺害してしまう。裁判で農民は主張を認められず、有罪の判決を受ける。この話を耳にした主人公は農民に同情し義憤に刈られるが、諦めざるを得ない。後で述べるように、エカチェリーナ二世はこの事件を「虚構の物語」と捉えたが、しかし当時ロシアでは農民の抗議行動が頻発し、モスクワ県では1751～73年の間に200余件の蜂起が発生し、農民による領主殺害事件は100件を超えていた<sup>22)</sup>。その意味でこの章で描かれた地主殺害事件は決して例外的な事件ではなかったわけである。

悪徳貴族の摘発だけではなく、農民の悲惨が国の体制に起因する構造的なものであることも、『旅』ではしばしば強調されている。例えば農民と地主(＝貴族)との関係が、「ペシキ」の章で、被害者と加害者の関係として、次のように普遍化されている。「ここには、我々貴族の貪欲・掠奪・虐待と、寄る辺無き人々の赤貧の境遇が見られる。貪欲なけだもの、飽くことを知らぬ蛭である我々は何を農民に残しているであろうか。奪い去ることのできないもの、すなわち空気である。しかも空気だけである。……法は農民から生命を奪うことを禁じている。しかし一気にはならぬまでのこと。農民から生命を徐々に取り上げる方法が、何とたくさんあることか。一方はほとんど全能であり、他方は寄る辺無き無力である。なぜなら地主は農民に対して、立法官、裁判官、自己の判決の執行者であり、望みによっては、被告がこちらに対して反論することのできない原告であるのだから。これが枷に釘付けにされ、悪臭込めるひとやに閉じ込められ、くびきをはめられた去勢牛の運命なのである。」(378、296-297)

## 3. ツァーリと宮廷

『旅』においては貴族の加害性は多くの場合農民に対して発揮されるが、貴族は高級官吏としても加害者性を演出している。その典型的な例が「サヴィドーヴォ」の章に見られる。旅行中の高官とその部下による人権蹂躪ぶりが滑稽に誇張表現され、その挙句に次のような諧謔的感想が添えられる。「独裁政治における貴人は幸いなり。官位と勲章リボンで飾られた人々は幸せなり。自然



もすべて彼らに従う。思考しない家畜さえも、彼らの希望を満たし、旅行中彼らが退屈して欠伸をすることがないように、彼らは軽装備も惜しまず疾走し、時には緊張で死ぬことすらあるのだ。」(372、285) 反対に弱者を擁護する肯定的な貴族も少数ながら登場する。例えば「チュードヴォ」の章のチェーや「ザイツォヴォ」の章のクレスチャンキン氏がその例である。両者は不当な人権侵害を糾弾するが、周囲の一般的貴族層の中であって孤立無援であり、撤退を余儀なくされる。彼らに同情するのは、主人公である旅人だけである。

貴族の頂点に位置するツァーリと宮廷も批判と諧謔的である。それは『旅』の中で最も重要な標的である。宮廷批判は「スパスカヤ・ポーレスチ」と「ヴィドロプースク」の二章で顕著である。前者は夢物語であり、後者は未来社会の記述である。架空の世界を導入することによって著者はカモフラージュを施しつつ、エカチェリーナ二世の治世そのものの批判に挑んでいる。

「スパスカヤ・ポーレスチ」の中で、旅人は自分がツァーリになった夢を見る。夢の中の「私」は人々に敬愛される理想的な君主である。「私の座す場所は純金から成り、色とりどりの宝石を巧みに散りばめて、燦然と輝いていた。」「硬い柄の上には天秤が架っていた。一つの皿には慈悲の掟という名の書物が、もう一つには良心の掟という名の書物が載せられていた。」(248-249、45-46) 周囲の人々は異口同音に賛辞を発する。「あの方は内外のあだをしずめ、祖国の境を広め、何千という様々な国民を自分の権標に従えた。……あの方は国を富ませ、内外の商業を広げた。あの方は学問と芸術を愛し、農耕と手工業を奨励する。」「あの方は賢明な立法者、正しい裁判官、熱心な行政家、あらゆるツァーリよりも偉大で、万人に自由を与える。」(248、45-46) (250、48) ツァーリである「私」を人々はこのように称賛するが、この場にイースチナ（真理）と名乗る老女が登場する。彼女は「私」の目からそれを覆っていた厚い膜を剥ぎ取り、「これからはすべてがその自然の姿で、お前の目に現れるだろう、」(252、52) と言い放つ。すると「私」は以前とはまったく異なる現実を目の当たりにし、驚愕する。「征服のために派遣された私の司令官は、おごりと慰みに溺れていた。軍隊には規律が無く、私の兵士たちは畜生にも劣ると見なされていた。」(254、55) 「私の慈悲は取引のたねとなり、多くを支払ったものへは、憐びんと寛大の小槌が響いた。罪科を許すことによって国民の中で慈悲深いと評判をとるところか、私はかたり、えせ善人、有害な道化師として知れわたった。」(255、56) 「都市建設は国費の浪費ばかりであった。」(256、57) 「私は今やありありと見た、私の授ける勲章の数々は、いつもそれに値し

ない者の手に渡っていたのだ。」(256、58) イースチナの形象に託されてここに描かれている内容は、誇張されてこそいるが、エカチェリーナ二世の政治状況と多くが合致しており、当時の政界の実情を映し出すものであった<sup>23)</sup>。エカチェリーナ二世は「スパスカヤ・ポーレスチ」の章への感想として、「雛鳥が親鳥に説教している、」<sup>24)</sup>と記した。親鳥が女帝であると仮定すれば、女帝はこれらの箇所を自分へのメッセージとして受け止めたとも想定される。ラジーシチェフ自身も女帝が読むことを願望しつつ、さらには、万が一にも女帝に影響することを夢見つつ、書いたのかもしれない。

エカチェリーナ二世に対する直接的な批判は「ヴィドロプースク」の章の「未来の計画」の中でも展開されている。まず貴族制そのものが批判される。貴族制は成立当初は社会に有益であったが、次第に有害化し、君主に悪影響を及ぼし始めた。神格化された君主と廷臣たちによる悪の相乗作用が確立し、位階表は悪弊の典型である。このように記された後に、「ツァーリの派手な行為のあらゆる有害な結果」(330、194) が列挙され、権力者が外観を重視する理由が次のように説明される。「その権力が市民たちの意見に基づいているところのツァーリの玉座は、彼の偉大さについての評判が、いつも無傷で犯されずにあるためには、外観の輝かしさによって、目立たなければならない。諸国民の権力者たちの派手な外観はこれが原因であり、彼らを取り巻く奴隷たちの群れは、これが原因である。」(328、192) しかし本来国民は、啓蒙されればされるほど外観の及ぼす影響が、少なくなるはずである。「今日では誰かが人心を引こうと望むならば、彼に必要なのは輝かしい外見ではなくて、条理の外見、いうなれば信念の外見なのだ。」「もし派手な外観が我々に無益だとしたら、その擁護者たちは国家にとっていかに害となるであろうか。」特権的な貴族は現実から遮断されているが故に、感覚を麻痺させ感受性を失って、非情にならざるを得ない。「この上なくひどい悲しみも傷も死そのものさえも、我々にとっては事物の流れの必然的な所産だと思われるだろう。」(329、192-193) 感受性の喪失を最も危惧していた著者の姿勢が、ここには明確に表示されている。

これらの文章は外観を重要視していたエカチェリーナ二世への辛辣な批判となったはずである。彼女はこの部分について次のように記している。「ツァーリが散々叱られており、次の言葉で結ばれている。自由と権力を相互の利益のためにいかに結合すべきか、と。今日のフランスの墮落した手本を目指している、と考えられる。」<sup>25)</sup> ラジーシチェフによるこの章の執筆はフランス革命より前であったが、女帝は革命との関連性を連想せざるを得

なかったであろう。

#### IV 裁判と獄中での執筆

##### 1. エカチェリーナ二世の反応

『旅』の発刊後一ヶ月足らずで著者に対する捜査が始まった。ラジーシチェフは取調べを予期して身の整理を急いだ。『旅』の原稿は処分し、印刷本はすべて家僕に焼却させた。焼却終了後間もない1790年6月30日の夜に彼は逮捕され、ペテロパヴロ要塞監獄に収容された。取り調べたのは、ブガチョフにも尋問した秘密調査局長ステパン・シェシコフスキーであり、厳しい尋問が7月13日頃まで続けられた。尋問内容はエカチェリーナ女帝自身によって定められた。彼女は『旅』の一部を入手して、詳細な感想を記し、シェシコフスキーに渡したのである。それは「ラジーシチェフの著書に対するエカチェリーナ二世のコメント」と題されて刊行されている。「コメント」は非常に分かりやすく書かれており、453頁から成る『旅』の原書の頁数すべてが明示されて感想が記されている。それ故どの箇所に関する感想かが一目瞭然である。女帝の秘書フラポヴィツキーは7月7日付けの日記に、女帝がラジーシチェフを「ブガチョフをしのぐ謀反人」と評した、と記しているが<sup>26)</sup>、「コメント」は彼女のこの言葉が誇張表現ではなく、本心であったことを裏付けている。

女帝は「ペシキ」の章に関連して次のような指示を与えている。「彼の本を最初から最後まで読んだと、そして、私がどのような侮辱を彼になしたか、読みながら疑念を懐いた、と著者に伝えよ。十分に聴聞するまでは彼を裁きたくはないからだ。もっとも彼は釈明を聞かずにツァーリたちを裁いているが。」そして終章では次の感想を記している。「彼は書物か他の方法でツァーリの手から王笏を奪い、指導者になる決意なのだろう。しかしその実行は一人では無理なので、何人かの共謀者がいたはずである。この件について、また、真の意図について彼に尋問すべきである。」<sup>27)</sup>『旅』の刊行はフランス革命の勃発直後に当たっており、その当時女帝は極度に敏感になっていた。『旅』の著者の背後に何らかの組織があったことを、彼女は真剣に疑っていたものと考えられる。

『旅』に対する女帝の感想をもう少し具体的に調べてみよう。『旅』の批判対象は政治批判と農奴制批判とに大別されるので、「コメント」の中で特に注目にする箇所を、双方の観点から抽出してみよう。現実の政治批判に対する反応としては、次のような感想がある。「119頁とその続きは……現在の政治形態の欠陥の指摘である。……124頁は不当な官吏の任用を示している。」「140頁。長官が収賄で非難される。……141頁の終りで貴人訪問

が非難されている。しかしそれは必要である。」(159)「278頁から288頁は位階表の廃止についてである。」(163)「306頁から340頁は検閲についてである。……著者はツァーリを好まず、ツァーリに対する愛と敬意を貶めることができる場合には、稀な大胆さを込めて難癖をつけている。」(163) 頌詩「自由」が挿入された「トヴェーリ」の章については、先にも引用したように、次のような感想を記している。「作詩法に託けて、反逆性が明々白々な頌詩を含んでおり、そこでは断頭台に架けられると云ってツァーリが脅かされている。クロムウェルの例が称賛されている。これらの頁は犯罪的であり、完全に反逆的である。」(163) また「スパスカヤ・ポーレスチ」の章における反戦的主張に対しては次のように記す。「戦争が殺人と呼ばれている。……防衛無くしては、トルコやタタールの捕虜になるだろう。」(157) このようにして、女帝のコメントは『旅』の各章の要点を客観的に記述しており、それに時々彼女自身の感想が付け加えられている。それは激怒であったり反論であったりするが、また為政者としての切実な立場も訴えられている。

次は農奴制批判に関する女帝の感想を拾ってみよう。農民の悲惨な状況が『旅』では執拗に描写されているが、それに対しても彼女は内容を要約した上で、自らの感想を述べている。「ザイツォヴォ」の章に関しては次のようである。「農民に対する地主の獸的待遇と、主人と三人の息子の殺害とを描写するために捏造された物語である。」(159)「147頁で農民階級の悲惨な運命を嘆いているが、しかし良き地主の下での我が国の農民の運命に勝るものは全世界に皆無であることも、論を待たない。」(160)「ホチーロフ」の章での感想。「地主に対する農民の反乱を志向している。……262頁。地主に農民の解放を訴えているが、誰も聞くまい。」(162)「メドノエ」の章での感想。「349頁は次の言葉で結ばれている。自由は忠告にではなく、隷従の苦しさそのものから期待すべきだ。すなわち著者は農民の反乱に期待している。」(163) 女帝の脳裏には理想化されたロシアの農民像が宿っており、幸せな農民像を彼女は世界に向かって喧伝してもいい。そのような彼女に『旅』における悲惨な農民描写は痛烈な衝撃を与えたに違いない。

##### 2. 尋問と判決

シェシコフスキーによる尋問は女帝の「コメント」に基づいて進められた。ラジーシチェフの答弁を紹介してみよう。先ず女帝にとって最大の懸念であった共謀者の有無については、彼は次のように答える。「自分自身反乱を起こそうとする目論見は少しも無かったので、共謀者もいませんでした。」(185) 女帝は『旅』の執筆動機として反乱教唆を想定したが、この点に関する問いに対

して、ラジーシチェフは次のように答えている。「この本を著すことによって私が反乱を起こそうと欲した、という者には、誤っている、と申しましょう。我が国の民衆は本を読まないこと、それは一般民衆には分からない言葉で書かれていること、そして印刷部数が非常に少ないことが……第一の理由です。」(171)「私がこの書を著した主な意図は作家として有名になり、以前の評判に勝る名声を人々の間に博することでした。」(174)

このようにしてラジーシチェフは共謀者の存在と反乱への意図とはきっぱり否認したが、農奴制批判と政治批判に関しては、どのように尋問に対応したのだろうか。次に述べるように、前者に関しては自己の主張を守り続け、後者に関しては自説を撤回したのである。先ず農民問題に関してだが、農民の暴力を肯定した「イエドロヴォ」の章に対する質問に対しては次のように答えている。「この記述によって農民に対する虐待を地主たちに諷め、改めさせたかったので書きました。」(179)「メドノエ」の章の結びの言葉「自由は……隷従の苦しさそのものから期待すべきだ」については、その真意を問われて、次のように答えている。「このように書いて私が考慮したことは、もし貴族が自分の農民に極度な重荷を負わせるようなことがあったなら、女帝の至高の力が彼らにそのような迫害をやめさせるだろうということでした。」(182) このようにして、農民関連の尋問に関しては、彼は基本的には『旅』における姿勢を崩していない。

共謀者の有無、反乱の意図、及び農民問題に関しては自己の主張を守り通したが、それ以外の尋問に対しては別の反応を示している。例えば、統治形態を誹謗した「ザイツォヴォ」の章に関する答えは次のようである。「種々の裁判で生じているかのように世間で時折噂される不法行為を基にして、自分の空理空論で記したのです。」(176) 高官批判が展開された「クレスチツィ」の章についても、同様の回答をしている。「高官に対する苦情や不満を他人から聞いて、記しました。」(177-178) 同じ章に示された貴人訪問への非難に関しても同様で、女帝の指摘に合わせて、貴人訪問は勤務上必要と、言い改めている。自己の主張を完全に撤回した返答も多い。検閲の撤廃を主張した「トルジョーク」の章に関しては次のように答えている。「私の謬見を認めます。私はそれなしで可能と思っていましたが、今は私自身の経験から、検閲が有益と認めます。」(181) このようにして自作の非を認め、結論として次のような謝罪へと導かれる。「私の件の本がたいへん醜悪でみだらで不遜な表現に満ちていたことを、今は非常に明確に理解いたします。……年老いた両親のために、そして稚い四人の子供たちのために、女帝陛下の御赦免を偏にお願い申し上げます。」<sup>(28)</sup>

エカチェリーナ二世は7月13に総司令官ヤコフ・ブリュス宛に命令書を発したが、そこで『旅』は次のように評されている。「……それは社会の安寧を破壊し当局に対するしかるべき敬意を貶め上官上司に対する憤怒の念を民衆に生じせしめんとする、極めて有害なる空理空論に満ちた、さらにはツァーリの位と権威とに対する侮辱的表現に満ちた書物である。」<sup>(29)</sup> 続けて命令書は、著者をサンクトペテルブルグ県刑事法廷で裁き、元老院へその判決を上申することを求めている。裁判は17日から24日まで行われ、著書の没収、著者の官位と貴族号の剥奪、そして死刑が決定された。8月7日に元老院がこの判決を追認し、さらに国家評議会が8月19日に承認した。しかし9月4日に勅令が發布され、シベリアのイリムスク要塞での10年間の流刑へと変更された。減刑の理由は対スウェーデン戦における和平の成立であった。

### 3. 獄中での執筆一遺書、手紙、「フィラレート伝」

獄中でラジーシチェフは二通の遺言、シェシコフスキー宛の手紙三通、及び聖者伝の翻案である「フィラレート伝」を著した。

遺書は死刑判決が下された直後の7月25日から27日にかけて書かれた。「来たるべきものが来た！もしこの遺書が届くなら、愛する者たちよ、不幸なる父にして友の言葉を聞いてほしい。」(338)<sup>(30)</sup> このように始まる遺書は、義姉と父母とを念頭に入れつつ、幼い四人の子供に宛てられている。「記憶せよ、神が存在することを、その全能の手なくして我々は何もできないことを。」「仕官に際しては義務を誠心誠意遂行せよ。……上官を敬い絶対服従を守り、女帝陛下の法を絶えず熱心に遂行しなさい。」(338) 子供に対するこのような教訓は、勾留中の身を意識して書いた戦略的な性格を想像させる。しかし次の文言はラジーシチェフの人柄をよく表している。「親戚を、そして年長者すべてを敬い、年少者には寛大でありなさい。召使には寛大で優しくしなさい。」(338) さらに彼は家僕について具体的な指示を与え、各人の名前を挙げつつ、それぞれに望ましい見の振り方を依頼している。二通目の遺書では、子供たちの将来の生き方についての指示が与えられている。この遺言の末尾は夢に救いを見出す文面となっており、短編「一週間の日記」や『旅』の文体を髣髴させる。「さらば、愛する者たち！ああ不幸な父があなた方にもたらした悲哀と極貧を許すことができますか？こう考えて魂は極度に苦しみ今にも消滅しそうです。……私の罪を許すというあなた方の声を聞くことができれば……ああ、会えれば、声が聞ければ！私の罪を許すという声が聞こえればいいのだが……ああ、夢想よ。……眠りよ、来てくれ。不幸の際の唯一の慰めであり、災いの中でのもの悲しい悦楽である愛すべき夢



想よ、私は汝と話したい！」(340) これは『旅』の「かどで」の文言「夢の中生きる人は幸いである」を想起させ、過剰なまでの感情表現も他の諸著作と共通している。子供たちとの再会への願望は非常に強く、シベリアで著した哲学論文「人間、その死と不死について」も、いずれかの世で子供と会える可能性を探るために書き始めた作品であった。

シェシコフスキー宛の手紙は三通あるが、まずラジーシチェフが求めたのは子供との会見の許可である。「もし子供たちと最後に会わせていただけたらどんなに幸いでしょう！」(341) ここには懺悔の形式で書かれた次のような文章も含まれている。「利口ぶることを夢見た罪人！心優しき君主の怒りを招いた罪人！罪無き幼子や女性たち、老いた両親を悲哀に導いた罪人！万人から嫌悪を招いた罪人！」(341) この文面は特定の読者を想定して記した戦略的な側面をも感じさせる。二通目の手紙では、家族への指示を懇願している。質草の支払期限の延長、下宿人への家賃の請求などに関して、五項目の指示が与えられている。「法で死刑を決められた人が、いわばこんな些事にかかわることができるなんて、貴殿には滑稽でしょう。」(343) 手紙の末尾では聖典を与えられたことに感謝しつつ、次のように記している。「読みながら、不幸にあっても慰めや元気を、そしてある種の激励を見出します。」(343) 三通目では、聖人フィラレートの伝記に感銘して、それを翻案したことを伝え、続編を執筆する許可を求めている。「書いておりますと、読む時よりも理性が集中し、自分が幽閉の身である事を瞬時ではあれ忘れてしまうように感じられます。」(344) 獄中で執筆する心境を彼はこのように記している。特に印象に残るのは、シェシコフスキーに対する次のような訴えである。「殿下、多分私の書いたものに退屈されたでしょうが、哀れな子供を失った悲哀によるものとお思ってください。あなたも人の子であり、子煩悩であることを思い起こし、私の失礼をお許しください。」(343) 尋問者に対するこの訴えには、情が勝った人物としてのラジーシチェフの人間的特徴が遺憾なく発揮されている。

三通目の手紙で指摘されているように、「フィラレート伝」は獄中で閲覧が許された書物『12月聖人伝と福音書』の中の「寛容なフィラレート」の翻案である<sup>31)</sup>。フィラレートは13世紀の小アジア人であるが、その聖者伝は15世紀よりロシアで読まれていた。我が子に読ませることが翻案の動機であることを、ラジーシチェフは次のように記している。「寛容な聖フィラレートの伝記を読んで、魂がひどくそれに惹かれ、彼の献身を深く考察するに至りました。……私は現在の思念に合わせてそれを翻案しましたが、原文の物語から少しも逸脱しておりませ

ん。私の子供たちにとってそれは有益なものと想像いたします。」(344) 彼は中途まで書いた原稿をシェシコフスキーに渡し、続編の執筆許可を求めたが、その願いは叶えられなかった。

彼の翻案は原作とだいぶ内容を異にしている。翻案では聖者伝としての宗教的色彩が大幅に払拭されている。たとえばフィラレートのアテネでの修養時代の描写には、ラジーシチェフ自身の留学時代の体験が反映されている。アテネのフィラレートは心理学、宗教学、倫理学など、様々な種類の近代的学問に惹かれ、教師フェオフィルと存在論や人間論に関する議論を展開する。これはラジーシチェフ自身の体験に基づく論議であり、後にシベリアで書いた人間論の論題と共通性を帯びている。

「フィラレート伝」の基本テーマは冒頭に明示されている。「あらゆる言語とあらゆる世紀を調べても、善行が嫌悪されたり、博愛が悪徳となったり、思いやりが蔑まれたりした例は見出せないだろう。それらの姿や形は異なっている、自然は常に不変であるから、善の根源は至る所で同一である。」(400) 聖人フィラレートはこれらの美德の完璧な実践者として登場する。そしてこれらの美德の価値を再確認することが作品の基本テーマとなっている。三つの美德の中で特に強調されているのは「思いやり милосердие, мягкосердие」である。それは「善行 добродетель, добродетелание」や「博愛 человеколюбие」の根源を成すものとして位置づけられている。「私はあらゆる方法であなたたちに思いやりを育もうと努力してきた。それは美德の身体的な基礎と称することができる。」「自然の歩みは徐徐であり、それ故に着実である。自然の道にしたがって、思いやりの心を弛まず鍛錬しなさい。そうすれば身体の訓練が体力を強化し、思考の訓練が知力を強化するように、思いやりの鍛錬は善行の基盤を強化するのだ。」(399) そのように「思いやり」が人間の本質であることを主張しつつ、それをキリスト教の教義と関連付ける。「キリスト教の教義は思いやりを神聖化した。至る所あらゆる状況の中でそれは称賛されている。キリストの教えこそが思いやりに殉じた人々を聖徒の列に加えたのである。」(400) フィラレートはこのような殉教者の典型として紹介されている。「この書がいつかあなた方に届くとすれば、これから読むのは完成した思いやりの心の手本である。……彼は自分の幸福をも忘れて、日々同胞の不幸を軽減しようと努めた。」(400) 「思いやり」と同じ内容を持つ言葉として、ラジーシチェフは「感受性、感じやすい чувствительность」という言葉を多くの著作で用いている。両者は同一の精神活動を示しており、人間性に本質的なものとして捉えられている。これは身近な者への愛から

遠い者への愛に広がる精神活動を示唆している。ここにこそ彼の批判精神の現代的かつ普遍的な価値を見出すことができよう。

頌詩「自由」に見られるように、ラジーシチェフは宗教一般に対して否定的な態度を示してきた。ロシア正教に対しても、直接的な批判は示さずとも、「ウシャコフの生涯」では笑い上戸の司祭が登場して、諧謔的に描かれている。「著者は完全な理神論者であり、彼の主張は東方正教の教義に合致していない。」(159) エカチェリーナ女帝もこう記して、再三彼の反宗教的な傾向を指摘している。彼女はまた『旅』の「クレスチツィ」の章に関して次のような感想を述べている。「184頁でソクラテスの例が引用され、善行を何よりも選ぶべきとする規則が示される。しかし善行が何に存するかはここでは不明のままである。」<sup>[32]</sup> ラジーシチェフにとってそれは人間に固有の感受性や同情心に導かれて、不正を正し、困窮者を救出する一連の行為を意味しており、現実の体制を批判する過激な内容を含んでもいた。獄中でフィラレートの聖者伝を読んだとき、彼は自分の倫理観と一致する部分を見出し、そこに注目したのであろう。その結果彼は自分自身の主要な倫理概念である「感じやすい心」もしくは「感受性」とキリスト教の「思いやり」とは同一のものであると認識し、聖者伝を利用しつつ、自己の従来倫理観を提示したのであろう。

## V おわりに

ラジーシチェフを「百科全書家」と特徴付けたロートマンは、この言葉の定義として、「その知識によってすべての学問領域をそっくり包摂する人のこと」と先ず説明し、さらに次のように述べている。「同時に百科全書家は、学問を実践だけでなく、社会学や政治とも結合しようとする。彼にとって抽象的な知識というものはない。学問と文化はつねに活動の形態である。」<sup>[33]</sup> ラジーシチェフを百科全書家の典型としたロートマンの主張が正鵠を射ていることは、流刑中から死に至る彼の生き方を調べれば一目瞭然である。残された著作のタイトルを記すだけでも、彼の関心の広がりを実生活との密着性が理解できる。シベリア時代の著作としては、哲学的論考「人間、その死と不死について」、経済関連の作として「中国貿易に関する書簡」、歴史関連の作として「シベリア略取に関する短い物語」がある。帰還後の作としては、独創的な文学作品「ボーヴァ」、「ある騎士への記念碑」、「古代スラヴ神の競技会で歌われた歌」、歴史に関しては韻文による「史歌」と「十八世紀」、農業に関する論考として「私の領地について」がある。さらに立法に関するものとして「ロシア法典分類案」、「市民法案」、「立法に

ついて」、「被被害者の価格」、および「裁判官に異議を唱え弁護士を選ぶ被告人の権利」がある。これら各著作の内容は、ラジーシチェフにとっては著作活動が現実の生活と常に結合していたことを示している<sup>[34]</sup>。流刑以前の著作活動と同様に、流刑後の著作活動もやはり文学的・哲学的創作と、仕事関連の創作とが並行して進展した。彼においては両様の創作は矛盾するものではなく、同じ目的を目指すものとして進行したものと思われる。そしてそれは特定の小集団ではなく、国民全般の利益を保障する方向性であった。

ここでゼンコフスキーに依拠しつつ、ラジーシチェフの活動をロシア思想史の中に位置付けてみよう。彼は次のように述べている。「18世紀のロシアにおいては思想の世俗化が非常な勢いで進行し、それは以前教会的ラジカリズムの側に立っていた人々の末裔たちを、世俗的ラジカリズムへと引き寄せた。ラジーシチェフは他の誰よりもはっきりと……自然法思想に依拠していたが、それは18世紀にはルソー主義と、そして同時代の不正への批判と、一体化していた。しかしもちろんラジーシチェフはこの点で孤立していたわけではなかった。彼はただ他の人々よりもはっきりと新しいイデオロギーを表現し、新しいイデオロギーの樹立に際して社会的かつ道徳的なテーマの優位性を、他の人々よりも完全に主張しただけであった。しかしラジーシチェフは何よりもまず、まさにこの後者の問題、即ち、自由な、非教会的な、世俗化されたイデオロギーの構築との関連で、評価することが必要である。」<sup>[35]</sup>

近代ロシアの社会批判は18世紀によりやく開始したが、それ以前のロシアでは宗教界で権力者に対する抵抗の歴史が積み重ねられてきた。ロシア中世文学の伝統には聖者伝や使徒書簡などがあり、ラジーシチェフはそれらの伝統を意図的に自身の創作に活用したといわれる。「18世紀の多くの他のロシア作家と同様に、ラジーシチェフは西欧文芸の社会評論を広く利用しただけではなく、古代ロシアの様々な伝統的宗教文献を改良もした。賛辞、説教、教訓、宗教書簡に基づいて、ラジーシチェフは独創的な社会評論を創造したのである。」<sup>[36]</sup> 現代ロシアの研究者はこう記すが、こうした視点からの考察も今後は必要とされよう。

エカチェリーナ二世はロシアを一大強国に育て上げ、膨大な富を背景に絢爛豪華な宮廷文化を演出した。それは帝政ロシアで最も眩い光にもたとえられる。しかしその光の背後には漆黒の闇が隠されていた。この闇もまた、光と同様に、明示されねばならぬものであった。この課題にラジーシチェフは最も果敢に挑戦したのである。18世紀のルボークに「牛は肉屋になる」と題される作品が

あり<sup>37)</sup>、そこには14点の逆転現象の図柄が描かれている。牛に屠殺される肉屋の図が大きく中心に描かれ、周囲には、金持ちが乞食から施しを受ける絵や、裁判官と小役人が百姓に裁かれる絵など13点がはめ込まれている。このルボークを極端な貧富の差が鮮明である社会への風刺画として捉えることができよう。そしてラジーシチェフの『旅』をそれに重ね合わせて捉えることが可能であろう。ツァーリが処刑される「ホチーロフ」や「トヴェーリ」の章を中心に、社会の不正を暴いた光景が数多く配置されているのである。観賞者は、いつもは目にすることができない、しかし真実のロシアの自画像を突きつけられて、深刻な思いに至ったはずである。

悲惨な社会状況に対する摘発は、その後ロシアで文学や評論の分野で連綿と続けられたが、しかしそれだけではなく、それは美術や音楽の分野にも波及した。絵画界ではエルメニョーフ、シバーノフ、セローフなどが、音楽界ではダルゴムィシスキーやムソルグスキーが、それぞれ社会批判的色彩の色濃い、世界でも稀な作品群を創造した<sup>38)</sup>。これらの芸術家すべてに共通することだが、ラジーシチェフの社会批判は心の深奥から生ずる強い実感に起因していた。直情が滲み出ている彼の表現には、いつの時代にも人の心を揺さぶる力が込められている。その意味で彼の批判精神は、新しい社会が成立することで役割を終える類のものではなく、いつの時代にも必要とされる性質のものである。

ラジーシチェフに関しては二人の息子が伝記を残している。先妻アンナとの間に生まれたニコライとパーヴェルとであるが、兄ニコライは父の相貌を次のように書いている。「さっぱりした性格で、あらゆる悲しみにストイックに耐え、決して歪むことなく、追従を嫌悪した。友情に厚く、侮辱はすぐに忘れ、誠実と潔癖が彼の際立った特徴だった。」弟のパーヴェルは次のように付け加えている。「中背で若いときは非常に男前で、きれいな鳶色の目をしており、女性に対する執着が強かった。」「自分で話し始めるよりも、問われて答えることが多く、一旦話すと熱を込めて話した。自分の関心のあることに深く係わり、それ以外のことには係わりを持たなかった。」<sup>39)</sup>シベリアで流刑生活を父と共にしたパーヴェルは地元住民への医療活動など、父の興味深い生活ぶりを懐かしげに綴っている。しかも彼はプーシキンによるラジーシチェフ論に対して精緻な反論を残してもいる<sup>40)</sup>。二人の息子は肉親でしか体験し得ない事実をもって、父の正確な人間像を伝える努力を示したわけである。ラジーシチェフは孫からも贈り物を受けている。二人目の妻となったエリザヴェータは先妻アンナの妹であるが、ラジーシチェフとの間にシベリアで3人の子を儲けた。その一人

フェクラの息子が絵画史に名を残すアレクセイ・ペトロヴィチ・ボゴリューボフである。彼はサラトフに立派な美術館を創設して、その名称に祖父の名前を捧げた。母フェクラは息子たちに祖父への敬愛の念を育んだという。身近な者たちへのラジーシチェフの愛は、こうして豊かな実を結んだ<sup>41)</sup>。

## 註

- 1) В. В. Зеньковский, История русской философии, том 1 часть 1 (Л., 1991), 96.
- 2) Ю. М. Лотман, Беседы о русской культуре (Санкт-Петербург, 1994), 258. ロートマン著、桑野隆他訳『ロシア貴族』(筑摩書房、1997年)、361-362頁。
- 3) 白倉克文「イリムスクへの旅—流刑人ラジーシチェフの最初の日々—」(『一橋論叢』第76巻第3号、1976年)；「ラジーシチェフ『人間、その死と不死について』」(金子幸彦編『ロシアの思想と文学』恒文社、1977年)；「シベリアにおけるラジーシチェフ」(ナウカ社『窓』第29号、1979年)；“On Alexander Radishchev's Ethical Ideas”, *Japanese Slavic and East European Studies*, vol. 2, 1981; “On Radishchev's Life and Works in His Last Years”, *Japanese Slavic and East European Studies*, vol. 13, 1992.
- 4) 例えば、А. В. Растягаев, Трансформация жанров древнерусской книжности в раннем творчестве А. Н. Радищева (М., 2007).
- 5) ラジーシチェフ著、渋谷一郎訳『ペテルブルグからモスクワへの旅』(東洋経済新報社、1958年)。
- 6) 例えば、坂内徳明「アレクサンドル・ラジーシチェフ『ペテルブルグからモスクワへの旅』の時代」(『一橋大学研究年報、人文科学研究』第38号、2001年)；今仁直人「アーレントからラジーシチェフへ—「民衆」の現象学のための予備的考察—」(『ロシア思想史研究』第1号、2004年)；今仁直人「ラジーシチェフの不死のボリス」(『ロシア思想史研究』第4号、2007年)。
- 7) 略伝に関しては主に次の資料を利用した。М. Муратов, Жизнь Радищева (М., -Л., 1949)；Л. И. Кулакова, Е. Г. Салита, В. А. Запалов, Радищев в Петербурге (Л., 1976)；Академия Наук СССР, Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями (М., -Л., 1959)；В. П. Семенников, Радищев; Очерки и исследования (М., 1923)；В. И. Покровский (сост.), Александр Николаевич Радищев; его жизнь и сочинения (М., 1907)；Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева (М., -Л., 1952)；Д. С. Бабкин, А. Н. Радищев Литературно-общественная деятельность (М., -Л., 1966)；Г. П. Макогоненко, Радищев и его время (М., 1956).
- 8) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 43.
- 9) А. Н. Радищев, Полное Собрание Сочинений 1-3 (М., -Л., 1938-1952).
- 10) А. Н. Радищев, Полное Собрание Сочинений 2, 282頁を参照。
- 11) この項目に関しては次を参照した。デヴィッド・ウォーレンズ著、栗生沢猛夫監修『ロシア皇帝歴代誌』(創元社、2001年)；田中・倉持・和田編『世界歴史体系 ロシア史2』(山川出版社、1994年)。
- 12) 図録『エルミタージュ美術館展—エカテリーナ二世の華麗なる遺産—』(2004年)、及び『国立エルミタージュ美術館所蔵エカテリーナ二世の四大ディナーセッソーヨーロッパ磁器に見る宮廷晩餐会』(2009年)を参照。
- 13) カッコ内の数字はロシア語版全集第1巻の頁数を示す。なお初期作品の訳文に関しては、修士論文の審査を担当された鈴



- 木秀勇一橋大学教授から教示を受けた。
- 14) 同じ歴史観が晩年の作「史歌」においても示されている。前掲拙稿 “On Radishchev’s Life and Works in His Last Years” を参照。
  - 15) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева (М., Л., 1952), 163.
  - 16) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 164. なおルソーによるピョートル大帝評価については次を参照。桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』(岩波文庫、1969年)、69-70頁。
  - 17) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 96. なお中神美砂「エカテリーナ二世の出版統制政策 貴族文化人の知的活動の変容」(博士論文、2009年)、93頁を参照。
  - 18) この節の執筆に当たっては、註7で示した資料の外に次の書物を参考にした。А. Н. Радищев, Путешествие из Петербурга в Москву. Вольность (Издание подготовил В. А. Западов) (Санкт-Петербург, 1992). 『旅』刊行時の海外での反響に関しては次を参照。David Marshall Lang, “Radishchev and Catherine 2, New Gleanings from Old Archives,” *Essays in Russian and Soviet History*, ed. J. S. Curtiss (New York, 1963).
  - 19) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 167.
  - 20) カッコ内の左の数字は全集第1巻の頁数、右の数字は日本語訳の頁数を示す。以下同じ。
  - 21) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 98. 同様の見解をゼンコフスキーも述べている。В. В. Зеньковский, История русской философии, том 1 часть 1, 96-97頁を参照。
  - 22) 田中・倉持・和田編『世界歴史体系 ロシア史2』(山川出版社、1994年)、75頁を参照。
  - 23) Л. И. Кулакова, В. А. Западов, А. Н. Радищева «Путешествие из Петербурга в Москву» Комментарий (Л., 1974), 72-89頁を参照。
  - 24) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 157.
  - 25) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 163.
  - 26) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 318. なお中神美砂「エカテリーナ二世の出版統制政策 貴族文化人の知的活動の変容」、94-96頁を参照。
  - 27) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 163-164.
  - 28) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 181, 185-186. なお中神美砂「エカテリーナ二世の出版統制政策 貴族文化人の知的活動の変容」93-97頁を参照。
  - 29) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 196. なお中神美砂「エカテリーナ二世の出版統制政策 貴族文化人の知的活動の変容」87頁を参照。
  - 30) カッコ内の数字は А. Н. Радищев, Полное Собрание Сочинений 3 の頁数を示す。なおシェシコフスキーに関しては次を参照。И. Курукин, Е. Никулина, Повседневная жизнь тайной канцелярии (М., 2008), 94-103.
  - 31) А. В. Растягаев, Трансформация жанров древнерусской книжности в раннем творчестве А. Н. Радищева, 129-142頁を参照。
  - 32) Д. С. Бабкин, Процесс А. Н. Радищева, 161. なお本稿第4章に関しては恩師金子幸彦一橋大学名誉教授から教示を受けた。
  - 33) Ю. М. Лотман, Беседы о русской культуре (Санкт-Петербург, 1994), 259. ロートマン著、桑野隆他訳『ロシア貴族』(筑摩書房、1997年) 362-363頁。
  - 34) これらの著作については次の前掲書を参照。今仁直人「ラジーシチェフの不死のボリス」; 拙稿 “On Radishchev’s Life and Works in His Last Years”
  - 35) В. В. Зеньковский, История русской философии, том 1 часть 1 (Л., 1991), 103.
  - 36) А. В. Растягаев, Трансформация жанров древнерусской книжности в раннем творчестве А. Н. Радищева, 50.
  - 37) *The lubok, Russian Folk Pictures 17th to 19th Century* (Aurora Art Publishers, Leningrad, 1984), 第48図、及び坂内徳明『ルボーク ロシアの民衆版画』(東洋書店、2006年)、136-142頁を参照。
  - 38) 拙稿「エルメニョーフの絵画について—ロシアの風俗画に関する一考察」(『ロシア思想史研究』第2号、2005年); 「日本とロシアの音楽史に関する比較的考察」(『芸術世界 東京工芸大学芸術学部紀要』第13号、2007年); 「日本とロシアの近代歌曲に関する比較的考察」(同第14号、2008年)を参照。
  - 39) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 46, 98.
  - 40) Биография А. Н. Радищева написанная его сыновьями, 102-110 を参照。また関連資料として次を参照。浅岡宣彦「ラジーシチェフとプーシキン」(『えうゐ』13号、1984年)。
  - 41) ラジーシチェフ美術館関連資料 По залам радищевского музея (Саратов, 1985), 17-28頁、71-92頁を参照。